

サウジアラビア王国紀行

～アラビアの自然～

小村幸二郎

ペイルート(第13図)を出て間もなく海拔3000m級の山を幾つかもつレバノン山脈を越えた機は やがてゆるやかにうねる丘とそのふもとに点在する農耕地の緑とで特徴づけられたジョルダンの東部を通り 首都アンマン・死海を右手に望み ネフユード砂漠の西端部をかすめて南下する。これからジェッダまでの間は 果てしなく続く砂漠と荒々しい肌をみせるヘジャース山脈の連山が眼下に展開されるだけで 生れおちて以来美しい自然にいだかれて育ってきた私たちにはその光景はショックである。かつて アラブの若き血をかきたてた栄光の進撃は これらの砂漠・山嶽を越えて 展開されていた。そして今を去る 900 年の昔ふたたび砂漠に閉じこめられ 文明を遠く離れて生きなければならなかったアラブの姿は哀れであった。変転きわまりない戦乱の世を見つけてきた砂漠。そして絶ゆることなく流されてきた真紅の血潮を吸いつづけてきた砂漠。それは 過去においても現在においても サウジアラビアに 妥協をゆるさず 忍従を強いてきた偉大な自然のなせるわざ以外の何物でもない。そこに住む人にとって 私たちの想像もおよばないほど 非情きわまりないアラビア半島の自然の姿はどうであろうか。一滴の水に無上の喜びを感じ 一陣の熱風に死を想いつづきなればならぬ人々の真の姿を知るために その生活の舞台をべっ見するのも無為ではなからう。

アラビア半島の地形は半島を縁どる4つの山脈と その内側の砂漠地帯とによって特徴づけられている(第14図)。半島の西部 紅海沿いに発達する海岸平野の東

方には アカバ湾付近から南方へ向って 海岸線にほぼ平行に 海拔1000~2000mのヘジャース山脈が走り その南方には 海拔3760mのハフル山を最高とするアシール山脈が走る。半島南部は高度約2000mのハドラマウト山脈によって縁どられ 南東部は 海拔3352mのアルジャバルアルアグダル山を最高とするオーマン(アグダル)山脈によって縁どられている。

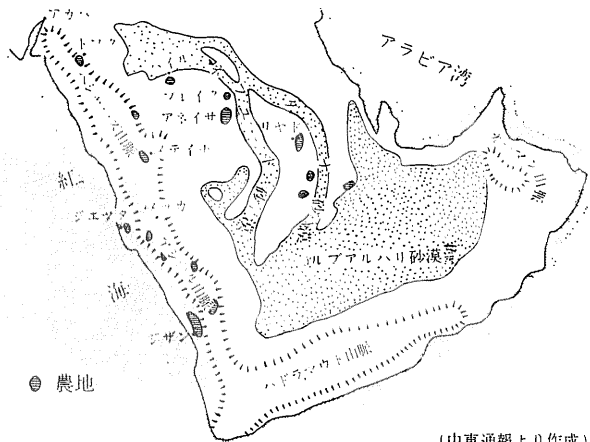
これらの山脈に囲まれた半島の大部分は 総体的に西方から東方へ向ってゆるく起伏しながら低くなっている高原性台地となっており その大部分はネフユード・ダーナ ルブアルハリ等の砂漠によっておおわれている。

紅海に面する 珊瑚礁の台地よりなる 幅数kmの海岸平野を隔てて 北西方から南東方へ走るヘジャース・アシール両山脈の東側に広がる台地は ネジト高原と呼ばれる。この高原にはアラビア楕状地の骨格となっている古期岩類が比高50m前後の丘をなしてあらわれており この高原がネフユード砂漠と接する付近にはハイブレイダ アネイザ等の農耕地がひらけている(第14図)。

ネフユード・ダーナ両砂漠の南端に続くルブアルハリ砂漠は 世界有数の大砂丘地帯として知られ 東西およそ1500km 南北およそ700kmにおよぶ広大な地域を占めている。この砂漠には 住む人がないばかりか 旅人の疲れ果てた心と身体に安らぎを与える何物もなく 見渡すかぎり 砂と岩の海原が横たわっているだけである。こよなく美しく見える砂丘 とくに満月の夜の青白い砂丘のたたずまいは そのおそろしさを知らない私たちにとっては この世のものとも思えないほど美しい。



第13図 地中海の東端部に面するレバノンの山でスキーを後方から見る風景。ここは中東第1の保養地を築くペイルートには背後で楽しむことが出来る。



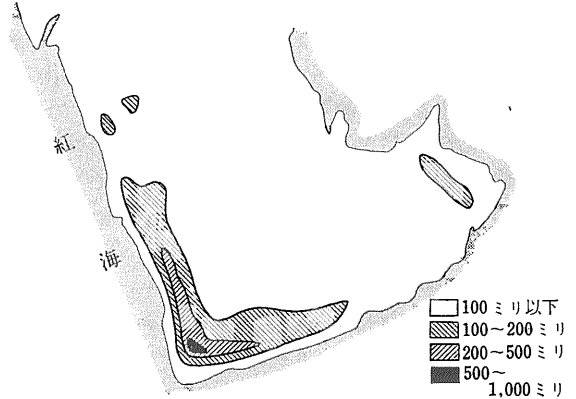
第14図 アラビア半島の地形 サウジアラビアの農地分布概念図 (中東通報より作成)

ラクダの背にゆられて砂丘を越える人のある光景を画いた一幅の絵は 幼き日の私たちを夢幻の世界にいざない 未知へのあこがれにかきたたえたものである。しかし その美しさの陰にかくされたおそろしさを教えてくれたものがあつたらうか。死の世界を思わせる静寂と 幻想的美しさをもつ砂漠も 一夜明ければ灼熱地獄と化す。容赦なく照りつける太陽をさえぎる砂嵐 それは指させば染まるかと思われる紺碧の空を灰色に染め旅を行く人を死への道にいざないかねない 「虚無の世界」と名付けられたこの大砂漠に横たわる無数の砂丘は高さ10~15m 時には 150 mにもおよぶが そのいずれもが この暴風の前には一たまりもなく 容貌を変えそしてどこへともなく移動されていく。今日もそして今もこの砂漠の片隅では 自然のきびしい掟の前に死への道をたどらねばならない何物かがある。砂漠の住民ですらおそれて立ち入ろうとしなかったこの大砂漠に あえて挑んだ若き日のアブドルアジーズの雄々しさは 私たちに 信念に生きる人間の強さを教えてくれた。そしてその死の世界にあって 己を信じ部下を信じて 幾多の苦難にさいなまれながら 信念に生きたアブドルアジーズのアラビア統一の夢も つきるところは この砂漠に育くまれそして現実として芽生えたのであろう。

目もくらむ日中の砂漠をとぼとぼと歩く時の辛さは どうてい 筆舌にはつきしがたい。砂に足をとられて行けども行けども 目的地に近づかない。そして時には砂や小石を含んだ熱風が叩きつけるように吹きまくる。喉はかわき しばらくすると ただ機械的に足を運かすのが精一杯で 目的地に着いたからといってとても石を叩く元氣すら残されてはいないことがある。しかし そうすることが自分に課せられた任務であり そして生きる道であればそうせざるを得ない。そうした苦痛の積み重なりがやがては立派に実ることを信じながら。

一日の仕事を終えてキャンプにたどり着いた時 「ああ今日も一日無事に生きのびた」とほっとするのが私たちの常だった。そして 西の空を茜に染めて 砂漠の果てに 山の端に 太陽が沈む時の雄大な美しさに尽きぬ感動を覚え 夜更の空にちりばめた無数の大粒の星の冷たい輝きに心の安らぎを感じ 遠く離れた故国に残した妻子を思う時 はじめてきびしい自然の中に強く生きぬいている自分を見出すのだった。

アラビア半島ではアシール ハドラマウト オーマン等の山脈のごく一部以外はほとんど雨が降らない。この半島に雨をもたらすのは常に西風である。この風によって運ばれた雨雲は 半島の西側に立ちほだかる山脈



第15図 アラビア半島雨量分布概念図 (アラビアの石油から) にさえぎられて この地域に雨をもたらし 高原地帯にはほとんど雨を降らせない。そのため半島の大部分は雨量 100mm 以下の酷暑乾燥の地となっている (第15図)。雨と生物 今さらここに述べるまでもなく 生けるものすべての命脈を左右するもっとも大きなものは水の存否であろう。そしてその存在は人間の定住と文化の発展のための温床となる。このことは アラビア半島においても例外ではなく 半島内でももっとも雨の多いイエメン付近に古くから文化が栄えたことによっても知られる。

貢物をたずさえて ダビデ王の息子ソロモン王に会うために はるばると旅をしたシバの女王は 現在のエチオピアにいたといわれているが 一説によれば イエメンにいたともいわれている。けんらんたる文化を誇ったイエメンにみやびやかな日々を送っていた女王が 甘い夢を胸に抱いて 恋しい人に会うためにはるばると苦難の道をたどったとすれば それは 乾ききったこの大陸の歴史にうるおいを与える一陣の涼風か慈雨にも似て現代に生きる人々の心にもいくばくかの安らぎと感動を与えるであろう。そして その美しく哀しい叙情詩もやはり水をたたえた緑の園なくしてはありえなかったのである。

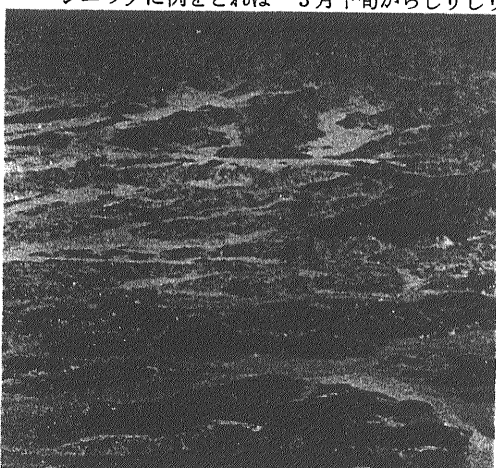
水 雨 人間が生きるために絶対欠くことのできないものである。潤れはたこの大地にも かつては豪雨が降り 濁流が渦を巻く時期があった。

砂漠をわたり 山峽の谷を通る折 私たちは 砂利や砂が美しい縞模様をなして整然と積重なった かつての河の跡に至る所を見た。そして機上からはその河の跡が無数に 無限に連なっているのが見えた(第16図)。そしてその水の跡が 私たちの目には 空しいというよりは むしろ腹だたいものにうつった。かつては大

きな角ばっていたであろう河底の石は まるで研磨機でもみがかれた珠玉のように小さくすりへらされ その上 その石の表面は砂漠ウルシにおおわれていて己の素顔すら見せてはいない。「もう10年近くも雨が降らない」と天を仰いで語る古老の陽焼けした顔にきざまれた深いシワとくぼんだ目が 現在のこの国の水に対する渴望の姿を卒直に表わしているようで うつむいてその話を聞く私たちの胸をえぐる思いであった。かつては溢れんばかりの水を流した河も干からびてしまった。そして現在 それは ワディ(涸川)と呼ばれ かつて水が流れたことを示しているにすぎない。今日もそして今も ベドウィンは このワディを埋めた石に足をとられながら ただ生きるために 水を求めて歩きつづけていることだろう。それにしても 自然は なぜにこれほどまでにきびしいのであろうか。

アラビア半島の気候の特徴を一口にいい表わせば酷暑乾燥ということになる。アラビアという所がものすごく乾燥していて暑いということはいっている人がおぼろげながら知っているが じゃ どの位暑いかという知っている人は案外に少ない。日本の真夏の最高気温はせいぜい 35°C 前後であるから アラビアの気象条件を体験したことのない日本人に 「アラビアでは日陰で風通しのよい一番涼しい場所で 50°C 以上になることが珍しくない」といっても その暑さの程度は恐らく想像してもらえないだろう。35°C と 40°C とではその暑さの程度はケタハズレに違い 43°C 位の暑さになると直射日光をうける手足などは竹製のモノサシか何かでピシリ! と叩かれたような痛さを感じる。しかし1年中そんなに暑いわけではないし また 場所によっても気温は相当に異なるので アラビアの気候を一口に説明するのはやさしくない。

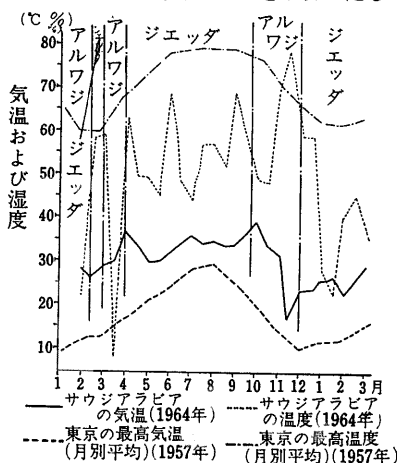
ジェッタに例をとれば 3月下旬からじりじりと暑く



第16図 Jeddahの北方150km付近の地質と地形(高度1500mで撮影) プレカンブリアン堆積岩類(変成岩)(上方および下方の灰黒色部)を貫く花崗岩類(中央の灰色部)とこれらをおおう玄武岩熔岩(右方中央の黒色部)白色および灰色の横線は涸谷(ワジ)でかつて水が流れたことを示しているだけで現在は砂や礫で埋められている(ワジ中の堆積物が地質の違いをよく示していることに注意)

なり 6月頃からは急に暑くなって 10月初旬までは暑さが続く。数年前はこの期間中に日陰で 56°C になったことがあるし 私たちがジェッタに到着した翌日 昭和38年10月3日の午後2時15分頃車中の気温は47°Cであった。午前10時半頃から午後4時頃までは日中でも一番暑く この時間の暑さはまったく想像以上で ポーシをかぶりサングラスをかけても 戸外へ出る気はしないし 2時頃から日没まではタクシーすら走っていない。そしてやせこけた野犬すら 自動車の下にもぐってゴロ寝をし 面白半分石をぶつけてもノソノソといかにも大儀そうにその日陰を動くだけである。この暑さの中にじっと立っているのはロバ位のものであろう。夜が明けてから夜まで 一日中 尻をハタカテ走りまわって働いているこのロバは 案外 この国では一番の働きものかもしれない。しかし この国で一番馬鹿にされているものもこのロバである。その理由は多分尻をたたかれながらもすごい暑さの中で働かされるからだろうが 全く見ていて可哀相になる。人を馬鹿にする時 アラブの人たちは よく「お前はロバみたいだ」というが こういわれた相手は まず例外なく 「なぜだ 俺はロバのような馬鹿者ではない」といきりたつ。まあこの時間の町の様相は「死の町」といった方が適当かもしれない。

10月中旬頃からは日一日と暑さもうすらくが しかし日本の秋のように 木の葉が落ちてカサカサと舗道をならし乙女の感傷をよぶといった風情はない。第1それほど木があるわけではなし また この時期にならうが正月がこようが 肌寒さをおぼえるほどの涼しさはやってこない(第17図)。しかし山岳地帯に入ると 12月末頃から想像以上に寒くなり 夜中に氷がはることもある。私たちがキャンプしたワジ町の東方でも 1月頃には 夜中に5°C 位になり その日の日中には 40°C 近くにもなったことがあったし 日中作業服の上にアノラックを着 手袋をしていても寒くて手が凍傷になったのではないかと心配になる位に寒いことがあった。このような気温の変化が自分の身体にどのような悪影響を与えるかということは 自覚症状が現われないので よくわからない。しかし 一日の気温差だけを見ても このような所での生



第17図 気温および湿度表(アルワジのキャンプでは3月中旬に43°Cになり ジェッタでは9月に56°Cになったことがある)

第1表 海洋の比較 (理科の年表による)

海洋名	面積 (10 ⁴ km ²)	体積 (10 ⁶ km ³)	最大深さ (m)	平均深さ (m)	水温 (℃)	塩分 (%)
紅海	0.438	0.215	2212	491	22.69	38.8
ペルシャ海湾	0.239	0.006	91	25	24.0?	36.7
オホーツク海	1.528	1.279	3374	838	1.50	30.9
東シナ海	1.249	0.235	2681	188	9.29	32.1
日本海	1.008	1.361	3610	1350	0.90	34.1

活が人間の寿命をかなり縮めていることは間違いないだろう。ジェッダの市内を歩いていても田舎へ行っても60才以上の人にはあまり逢わない。頭髮の白いそして深い無数のシワをきざんだ顔の人を見て「もう70才位になるだろう」と思って 年令をたずねると その人たちの多くは50才台である。こうしたことからみても この国のように気象条件のきびしさの中に生きる人たちがいかに短命であるかを推察することができる。

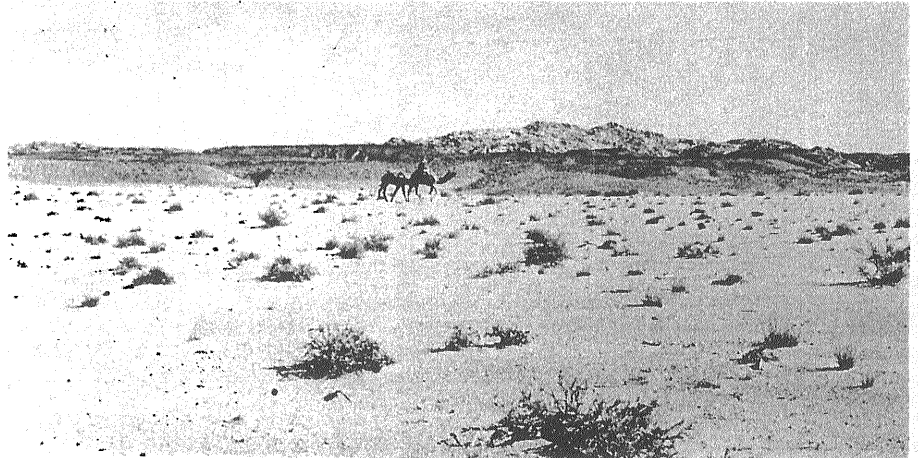
夏の間はまったく暑い。役所への往復に乗る車はものすごく熱くてさわものさえ嫌になる。ジェッダへ着いた直後「自動車のボンネットや天井で目玉焼きができる」という話を聞いて「そんな馬鹿な」と思ったものだが 後日 それが事実であることを知ってたまげてしまった。この国の夏がいかに暑いかということはいくら書いても書きつくせそうにないし また 私の表現力の乏しい文章ではとてもうまく書き表わせそうにないので先へ進もう。息苦しいほどの暑さも日没後は 日中の暑さがうそのように しのぎやすくなる。そして澄みきった空にきらめく大粒の無数の星をながめ 大きな月の光を浴びて ジャスミンの香りをふくむそよ風にほほをなぶらせながらお茶を飲み 友と語らうアラビアの夜は捨てがたい情緒がある。

この国の大部分は高温乾燥気候であるため 水分の蒸発がげしく 土壌中の塩分も半島をとりまく海水中の塩分も濃度が高い(第1表) したがって植物の生育はきわめて悪く オアシス以外の場所では 山岳地帯はもちろん 平地であっても かつて流水を見たワディ中に背の低い灌木が点在しているにすぎない(第18図)。この国でもっとも代表的かつ有用な植物はナハル(ナツメヤシ)(第19図)で その果実は住民の主要

食糧の一つとなっている。この果実の乾したものの味は日本の干柿の味にそっくりなので 私たちは1年半の滞在中 時折これを食べ 故国をしのぶよすがとした。また これの幹は建築材料として 葉は家具の材料やかんたんな家屋の屋根をふく材料として利用されるので無駄な部分はまったくない。したがってこの木はこの国の人たちにとっては もっとも貴重な財産の一つとなっている。私たちは 調査旅行の折 人夫や運転手達が楽しく語らう時よく「アンナハル」と云うのを聞いたがこのような場合に使われるこの言葉は ナツメヤシという意味ではなく「恋しい人」あるいは「貴いお方」という意味をもっているそうである。こうした言葉一つにもこの国の人がナツメヤシをいかに大切にそしてそれをもつ希望に燃えているかがうかがわれる。

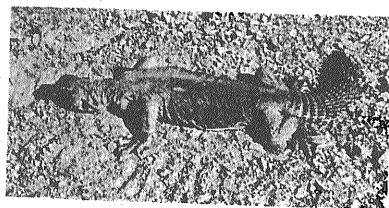
ナツメヤシの他にはタマリスク バルサム アカシア その他いろいろの木があるが バルサムやアカシアの木が 私たちが子供の頃使った「アラビア糊」の原料となるゴムを含んでいることを知っている人は意外に少ない。キャンプ生活中 ワジ町の人やベドウィンからもう10年近くも雨が降らないと聞いて「本当かな?」と思い また「そんなはずはない」と疑ったりした。10年も雨が降らないで第一木が生きているわけがないのに調査地内には緑の葉をつけた木が生えているではないか。しかし 私たちのこのような疑いははれるにはそう時間がかからなかった。酷暑乾燥地帯の植物は 湿潤地帯の植物よりも より多くの根をより広くそして深く地中にはって水分を吸収しているということを知ったからである。試みに高さ 50cm 前後の灌木の枝を折ってみると 多量の水分が含まれているのには驚かされる。

アラビア半島に生育する植物の中で私たちの生活に直接関係をもつものにコーヒーの木がある。そしてこのコーヒーは モカコーヒーの名で知られているが もと



第18図 ワジに生えた灌木 (Al Wajh 町の南東方約 35 km) 水気のまったくみられない所にもこのような木が点々と生えている 一見枯れているように見えるが 枝を折ってみると水分があふれんばかりに含まれている 旅人の後方灰色の部分は段丘堆積物 その後方は花崗岩

もこの半島の原産ではなく 今からおよそ 600 年前にエチオピアから輸入されたものである。そしてモカという名前はそれの積出港である紅海に面するイエメンの商港モカ (Mukka) の名前をとったもので その栽培地は雨量の多いアシール山脈の南部付近の山腹に限られている。サウジアラビアでは 食料となる植物はきわめて少なく 第14図に示した農耕地において ごく少量のトマト キュウリ 玉ネギ ジャガイモ等が栽培されているにすぎない。また一部では香水の原料となる蘭科の植物が栽培されている。野菜類はほとんど外国からの輸入品であり たしかに不足してはいるが 金持のこの国にとっては輸入価格などは大した問題ではなく 小売価格も政府の援助が大きいので割り合いに安い。

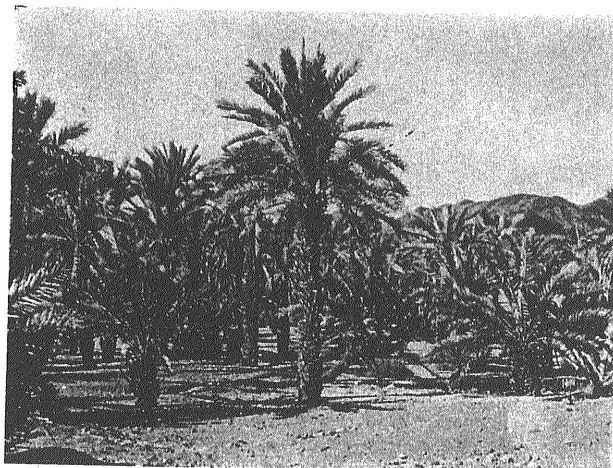


第20図 ザップ(トカゲ)
岩の割れ目を利用して穴や平地に掘った穴の中に棲んでいる 首から頭にかけては亀とまったく同じである 大きいものは体長50cm位あり人の気配を感じるとこのからだからは想像もつかない速さで穴へ逃げる 肉は白く味は鶏肉に似てうまいので食用として珍重される

しかし 植物が生育しにくいという条件のベドウィンに対する影響は 私たちの想像以上に深刻である。家畜の飼料となる木の葉は 注意深く単念に探しまわらなければみつからないほど少ないので 多くの羊やラクダを連れてくるベドウィンの苦労は大変なものである。海岸から遠い山岳地帯の奥深く入れば 平野よりも幾らか雨量が多いので 多少は飼料も多いだろうが それほど奥地へ入りこむと こんどは自分たちの食糧を求めるために町や部落へ行く距離が遠くなる。自分がベドウィンである以上 恐らく生涯 この苦労はつきまとうことだろう。

水の乏しさは すべてのものに生きることの苦しみを余儀なくさせ 時にはそこに生きることをはばむ。見渡すかぎり乾き切った岩と砂のこの地には水を湛えた井戸もそう多くはないし また 流れる水を見ることはまずない。しかし 生きるためにそれほど不利な条件下にあるこの地にも 結構いろんな動物が生きている。

山猫 鹿 ウサギ ザップ(トカゲ)(第20図)をはじめとするいろいろの動物 トビ・カラス・ハトや様々



第19図 Al Ayn のオアシスで栽培されているナツメヤシ ナツメヤシの実の梅の実大で 10kg 以上が一かたまりになっている これの干したものは日本の干柿とまったく同じ味である

の小鳥 そして砂漠につきもののサソリやハイヤーと呼ばれる毒蛇 ハイネスと呼ばれる青大将によく似た蛇 毒グモ いろいろの蛾やトンボ・蝶類 数えあげればきりが無いほど いろいろの生物が生息している。このような生物が どこで水を飲み どこで何を食べて生きているかは判らない。生きる条件がきびしければきびしいほど 生きる力は 己の生命を永らえるために よりたくましく そしてより効果的に 自分自身のためだけに最大限に発揮される。そして己の欲望がみにくくさらけだされた時 悲惨なそしていまわしい 斗争が繰りひろげられる。弱肉強食。それは不毛の地に生きるものの のがれることのできない宿命であろうか。

弱肉強食。恐ろしい言葉ではある。しかし それは 決して 不毛の地に生きるもののみのがれることのできない宿命であるとは限らない。高度に発達した文化に恵まれて生きる現在の私たちのまわりにも 現実には 弱肉強食ということばがそのまま当はまることが行なわれているではないか。

焼けつくような真白の砂の上に飛び散った真赤な血。そのべっとりとした血も瞬時にして乾ききってしまう。そして斗争が終る。その後訪ずれるものはただ静寂である。まるで何事もなかったかのように。しかし現代の人間社会においては ある時期を転機として 弱い者の立場は 多分 その人が生きているかぎり続くことだろう。そして世の中を真面目に考え真面目に生きようとすればする程 自分の立場をより悪くする可能性が生じてくることが少なくない。手に汗して 自分を押しやって世の中のために生きようとする人の中に 静かに世相をみつめ 自分の生きる信条を考えて がっくりとか細い肩を落さないでもよい人がどれほどいるだろうか。昭和39年12月初旬キャンプから 25km ばかり離れた山峡の地で 右臀部から太腿にかけて山猫に噛みとられ死に絶えて横たわっている仔鹿を見つけた(第21図)。黒くそして大きなたぶらな腫をばっちり開いて横たわっているその仔鹿はとつても死んでいるとは思えなかったが その可哀相な姿を見つめている中に 強いもの



第21図 Al Wajh 町の東方70 km 付近でみた仔鹿の死骸
山猫におそわれて息絶えたこの仔鹿の臀部には白い骨がむき出して
いた 死んで間もないとみえ 十分に食用に供することができた
が 死体を忌み嫌うアラビア人は 自分の手で殺したものを食
べないので そのままにしてここを去った 2~3日もすれば
体中の水分は完全に蒸発してカチンカチンになることだろう

への怒りがこみあげてくるのをどうしようもなかった。
しかし よく考えてみなければ 歯にはさまった肉をわ
ずらわしように 満ち足りた欲望に強いものの優越感を
存分に味わいながら 舌なめずりをしてのうのうと寝
べっているであろうその山猫の仕事をありうべからざる
こととして一概にせめつけることはできないのかもしれ
ない。血を血で洗う殺しあいはこの砂漠のどこかで
今も行なわれていることだろう。希望が欲望に変わった
時 そこには必ずみにくい殺りくが行なわれる。そし
て かつてのアラブもその例外ではなかったようである。
結局は この耐えがたいほどの暑さにさいなまれる大地
も一転すれば 冷い死の世界に変貌せざるを得ないので
あろうか。

アラビア半島とアジア大陸との間に横たわるアラビア
(ペルシア)湾は 延長約 1000km 最大幅約360kmで
古くから石油の宝庫として知られている。この湾は
地層の撓曲部に海水が侵入したために形成されたといわ
れており 石油の他天然真珠をはじめとする水産資源の
面でも注目されている。とくにパーレン島付近には真
珠貝が多く この付近の天然真珠は 紀元前2000年頃華
やかさをうたわれたアッシリア文化史上に名をとどめる
ものとして 有名である。

半島の南部が面するアラビア海は「赤潮(主としてプ
ラクトンによって赤色に着色された海水)」の発生地
として知られているが とくにその西端部にあたるアデ
ン湾は「ジュゴン」の産地として有名で 以前は新聞
雑誌上に広く紹介された。しかし 世人の耳目を集め
たこのジュゴンも最近はほとんどみられなくなった。

アラビア半島とアフリカ大陸とがもっとも接近して
いるバベルマンテブ海峡からスエズまで延長およそ 2100
km 最大幅 360km におよぶ紅海は スエズ運河の開通
を機に アジアとヨーロッパとを結ぶ要路として 一躍

脚光を浴びるようになった。この海は 昔へブル人によ
って「葦の海」と呼ばれていたが その後 ギリシ
ア人が「赤い海」と誤訳して以来 紅海と呼ばれるよ
うになった。この国へ行く前 私は紅海という名がどう
してつけられたかということに疑問を抱き 多分「赤潮」
によって特徴づけられているか またはその発生地だ
からそう名付けられたのであろうと勝手に想像していた
が この予想はみごとにはずれてしまった。そしてこ
の海を見て その色が 地中海の青さに勝るとも劣らぬ
ほど青くそしてすみきっているのに驚いてしまった。

紅海は アラビア湾とは形成機構を異にし 断裂運動
によって生じた地溝帯に海水が侵入して形成されたとい
われている。

この狭長な海の海岸線近くには無数の珊瑚礁の島が点
在している。真白のこれらの島々は 紺碧の海の色に
映えて 南海ならではの夢幻境を作っているが その美
観のすばらしさは これらの島々が映画「青い大陸」の
舞台となったことによっても判ってもらえるだろう。

紅海の北端部からスエズにかけてはシンキロウの発
生地として有名である。油を流したようにべったりとな
いだ波一つない紅海の船旅は 熱風のなぶるがままに身
をまかせざるを得ないので 苦痛である。そして そ
の辛い船旅がようやく終りに近づく頃 船上の人々は
すばらしいシンキロウを見て きっと嘆声をあげるこ
とだろう。しかし そのシンキロウが 無限の砂漠にき
らびやかなそして尊大な姿を見せるモスク(回教寺院)
の巨大なドーム(第22図)であるか ミナレット(尖塔)
であるか または清水の湧き出る緑の園であるかはそこ
に旅したことのない私にはむろんわかるはずがない。
しかし 仮にそのような影像が見えたとしても それは
あくまでシンキロウであり 空しいものであることには
間違いない。(つづく)(筆者は鉱床部 現在サウジアラビア国在勤)



第22図 典型的な回教寺院(モスク)(カイロのモハメッド・
アリモスク) この寺院はアラバスターで建築され
ていることで有名である